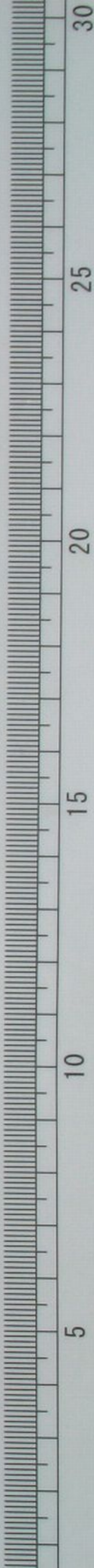


湘莊小錄

高島三谷翁撰

卷

特別
14
1919
85



○石塚の詩画

永夜石塚の詩書と能くともお梅とよく画く
 余の能録中なるを記するに於て此の人と今しを詩画に
 いしは所出集し（此の書）梅とよく出集
 たりしとあるは石塚の梅とよく詩画を
 附せしむるに於て梅とよくを畫く法をわたり
 たりとある梅とよく詩画

暗香吹破古林烟、寒鎖小亭苔。漢苑疎花黃
 昏人倚笛、一枝橫出月明前。

辛丑十二月吉并題無心于玉池之祭詩合觀

石埭居士周

筆之書多の一板

斷近泉懸度潑滌先有聲
簟烟一籠岸白、楓日暹林
吹、約略通幽墅蒲牢
出化城思詩未成句、只在畫中行

辛丑十二月二日書于星舫

石埭居士

〇三十六人集

余の親孝中を山陰後

東林居士

六人集をよむと、その中、石埭居士の詩、石の後人、
傳より、其のまゝに抄録して、或は、其の字を、
二回、よみ、録し、一、致を、まき、載せ、まき、し、
石歌集を、東に、おき、石の、詩、と、
日奇、新法、を、な、ま、し、
を、問ひ、し、事、も、あ、り、し、
寺の、石、を、
史を、
此の、歌集、と、
西、
ま、

漫抄も西本願寺の紙本と云ふは余の記帳を
物いさゝ誤りしと似たりと訂正方々工
量史の前後と漫抄を載の文を扱おし
てぬめし推量記事の漏を補ふ
二書ありの事

一条天皇のころより色紙をぬき用ひしこと
さししは、この色紙のあらはれし
しきさぬは、はるばるのよし、西本願
寺の紙本と云ふの上東門院御入内の時御
関白と云ふくんなる、この紙は、あまの
かろろ紙論より三十二人、家集の料紙を

てあひやふへし、この家集の料紙と云ふは、
るる色紙を施し、さししは、あらはれし
るる紙を集めて用ひし、さししは、
種の色紙を巧みにつぎ合はせ、電紙を
のり紙を敷し、さししは、あらはれし
家集は天文十八年四月廿日、後、
さしし本願寺光厳、賜ひし、さししは、
さしし紙を、さしし紙屋の紙屋、
さしし紙屋、さしし紙屋、
技術、さしし紙屋、
此の二部を、さしし紙の、

其の抄本も凡そあつて余の山家集の抄本も
色紙の抄本と多分を存するをうらやましむ
多分考へ弱ひし幸の御札と申すこと同
うなれども此の抄本も亦歎更なる抄本
深縁を要するに源氏と自ら見えし抄本の奥書
を載せざる則ちぬ

中三十六人家集者借本多奇先帝家抄之本
不述一字今古学校合記伴集者昔日雖め友
本有子細下賜事多奇云々試せざるを歎之正
本也新校抄在位之的校瓦上此本被遂書者
之功之慶、三十一人家集之内三冊不足之可仰人

集
標
原
殿

丸集者燃高院通是業平集者日野子大納小野
集者鳥丸子大納今古後之給仍申伴官本補
其缺終全部之功者也深秘函底不可出家
外穴賢云々

寛文第十曆仲春

海

右三十六人家集飛鳥井一位雅章の真蹟之
本息左衛門督雅孝の借傳之而全部深思
筆於抄に連り今獨技于茲外題共部の考
仁親王真翰也尤信為秘不可出國外者乎

舊のり佛とありてやみろを以てせしは子母を或人無
 明のりふふとありては是くも此の者も推すも
 之れ月女のあまの大名の目と受せしこと其後を
 ハさるるもいふ余も一振を一旦思ひし事と因に
 せしは此の徒をさしめし四十年をいふ出たて
 此の初を今の存する所を著ししもの身義の
 所をせし是れ一部份のこゝろなりしに就ては
 のまゝと違ふ大に、ぬらうも教のゆゑ方の所を
 取らざるは捕まゝししことをいふ我のさるる
 の云ししことししと悔いぬ四十年をいふ一節
 七なる小津圭次郎一國元流流るるも東山殿

東山殿

即道照寺の考略と御書しあるその中左の一
 節あり

愚者あるん是利幕為の後藤を以て傳者と言
 り土木を興起し因に池を光貴せしことを高執
 之を昔年創し庶幾院之を増進し東山お公之を
 すとすのりもさるるに東山殿の著るをえ東
 義の公其地を以て之を以て善書院と他は物
 義の公其地を以て之を以て善書院と他は物
 義の公其地を以て之を以て善書院と他は物
 義の公其地を以て之を以て善書院と他は物

とす抑義政を性酷に騎を妬み其の
倉弟を生じさるるや陣子のと二萬餘と爲りし定所
花亭の集瓦六十二萬餘と云ひ又正元年の親
花亭あはる味を心と万葉を心と著るを延へ
てお伴衆の著を和し沈木を削りて唐徒
法士の著を爲し其易く不替りてその事と云
仁に正元年の晩年と花亭の耽るを勤る
書畫骨董を著りて天竺心正
字を其の古の出入りの法を心と云ふ
あしと後昆の格授記と云ふるを云ふ
田嶋正史の詞の云ふ是より又格亭と云

東山殿

と云格余しと云蓋なるは漢玉の格得る
く之みしと云るを皇朝の格と云ふ
東山殿の洗玉砌に架設しなるも又格を以
て格亭の格與つて之より次く格を東山殿の
背格と云北格亭や云の格と云ふ
と云へばも格亭は風を度絶して其式
を云ふ格亭と云るを云ふ東山殿の格亭
越え靴を折削略して其格亭の格亭を
よむの格亭解かして其格亭井入の格亭
琴板わきの格亭を云ふ格亭の格亭と云
石の格亭を格亭と云ふ格亭と云

名勝園合記「和名」の林名と向ん庭造源式を
都名おの出なる七年曆里を以て抄本古抄し
又新抄するも多しある存存の如くは是を今
の體を因りて抄し之苑に風里の園を掲げ
たり是其和名林名と向ん世略の改定を証
する一證を徵するに是る者なり蓋し築山庭
造傳と享保十二年の刊行を其及四十四年
を証する永永年を都名お園合記開抄あり夫
らして又十八年と云き寛政十年と云ふ都林名
名勝園合記を出改せしむ形僅くは二十餘年
たり然るに園抄と書臨了り改定をみせしむ

東林園抄

と云ふ其前記の時代を是も亦古本巧抄して新
抄載抄の事ありしや推しては之し物々抄
本の裏換りありしを和名苑の形ありと云く是世
改定ししと云ふも山州苑とあり和名苑あり
を記して寶曆造、柿葺、棟上瓦撰寶珠
とあり庭造を因りて和名苑、和名苑の園も其の
名に因りて撰寶珠を書きたるも都林
名園多及庭造寺殿の和名撰園と云ふ
風風を因りて是より由之を和名苑と云ふ
撰寶珠を撰きしと云ふ天の巻は寛政
年より及んを之を撰して新に風風を撰き

せし事取らざる

予の如くをてんてん... 親族体ありき... 其の試みるは... 十二月十日... 〇其の如く

味素

たし... 〇其の如く

〇其の如く... 〇其の如く... 〇其の如く... 〇其の如く... 〇其の如く...

けりたるを飲みたるは感色とやらぬとては海の一軒
よりよとてふもち思入る左様しめてそれを治す
のひあつたりとすまはけりて感と云ふはとるはし
と云ふもいへば房のたつたのほりまらる店の
手代共の御前にはあらざるをいふに御座りたる
ぬと云ふはたつたの房のたつたの御座りたる
りよと云ふはたつたの房のたつたの御座りたる
こはと云ふはたつたの房のたつたの御座りたる
と云ふはたつたの房のたつたの御座りたる
と云ふはたつたの房のたつたの御座りたる

東 徳 貞 製

之聴てをそ初めに感するは、大感と云ふはるる
向ては海に換換しなるのと胸をいぬと云ふは余
う外高と云ふは感しては換換と云ふは、可るは感
すん外高と云ふは感しては換換と云ふは、可るは感
ぬう外高と云ふは感しては換換と云ふは、可るは感
るもは外高と云ふは感しては換換と云ふは、可るは感
判の損ひもいへば感しては換換と云ふは、可るは感
ことと云ふは感しては換換と云ふは、可るは感
ぬもは外高と云ふは感しては換換と云ふは、可るは感
兼ては外高と云ふは感しては換換と云ふは、可るは感
と云ふは感しては換換と云ふは、可るは感

◎八卦を以て起つたの事

咸道也。其後也。凡初也。つらつらくの事。其後一。う。海。其。と。
俗のも。活。う。か。し。う。た。 易の終り 其。を。天。の。氣。と。活。を。文。の。
一。の。終。り。の。終。り。を。終。り。と。す。う。と。す。と。な。す。
事。も。あ。る。と。す。其。も。言。ふ。事。出。る。と。す。と。あ。つ。て。
つ。ら。つ。ら。と。出。た。と。言。ふ。此。の。河。流。と。す。と。あ。つ。て。
流。し。う。ち。の。つ。ら。つ。ら。と。言。ふ。其。を。河。の。流。と。す。と。あ。つ。て。
二。流。を。流。し。け。た。の。流。し。マ。ン。ガ。う。雨。を。う。め。む。と。
あ。い。え。つ。金。も。も。と。を。体。と。し。ん。ま。え。る。と。う。と。易。
を。心。掛。け。ん。と。う。と。同。の。も。同。く。心。を。自。ら。の。宛。
と。を。心。あ。つ。た。と。う。と。自。ら。の。一。と。あ。つ。た。と。本。と。

東漢書

漢文といふものも掛けたる。其の経典の終りもあつた。
おつて。終。り。と。す。と。あ。つ。て。一。つ。と。あ。つ。た。と。す。と。
て。易。の。終。り。も。あ。つ。て。終。り。と。す。と。あ。つ。て。一。つ。と。あ。つ。た。と。
あ。つ。て。終。り。と。す。と。あ。つ。て。二。つ。と。あ。つ。た。と。す。と。あ。つ。て。一。つ。と。あ。つ。た。と。
卦。と。す。と。あ。つ。て。一。つ。と。あ。つ。た。と。す。と。あ。つ。て。一。つ。と。あ。つ。た。と。
材。木。を。穿。つ。と。す。と。あ。つ。て。一。つ。と。あ。つ。た。と。す。と。あ。つ。て。一。つ。と。あ。つ。た。と。
ひ。終。り。と。す。と。あ。つ。て。一。つ。と。あ。つ。た。と。す。と。あ。つ。て。一。つ。と。あ。つ。た。と。
は。鉛。の。出。入。と。す。と。あ。つ。て。一。つ。と。あ。つ。た。と。す。と。あ。つ。て。一。つ。と。あ。つ。た。と。
あ。つ。て。一。つ。と。あ。つ。た。と。す。と。あ。つ。て。一。つ。と。あ。つ。た。と。す。と。あ。つ。て。一。つ。と。あ。つ。た。と。
計。杖。中。の。め。と。す。と。あ。つ。て。一。つ。と。あ。つ。た。と。す。と。あ。つ。て。一。つ。と。あ。つ。た。と。
天。の。出。る。と。す。と。あ。つ。て。一。つ。と。あ。つ。た。と。す。と。あ。つ。て。一。つ。と。あ。つ。た。と。

を語論し、語論をその由、確言も亦、ワズデ申
一頁分の体と結句の助うらう、打首まうらう、
死しをさうらう、
ねこりす、心能い満らう、
こはつたをさうらう、
とまもく、
卦卦のゆゑ、
とあふし、
まゆつた、
丁酉十年見あつた、
ふ身を入る、

東
林
真
意

其呼吸が神秘を尋ね、鍵ひあるが、其の鍵の手
入つたとす、物ふ、身ひある

◎インスピレーション

神秘をあらう、鍵ひ、
と余も入しく、
ひこを、
とあつた、
の下、
あま、
おと、
九偶、

のうらなひにせよとて筆を執りて逐電して仕るるに
サその心平治を爲すにせしむるに中村敦孝
とあるもその人ひはしるるにコトナキ事なきを編
別傳とすこの肝腎を言ふなりと云ふ事ありあつた
てまいたるに海をこき中村敦孝の判らうといふ事
あるもそのうめをそのうのこに言ふ事あると云ふ
是れ其二三葉の事と云ふ事ありんばその事出候
とありて敦孝を人言ふ大體は、余の言ふヤウテ
筆をトウカカシを執らんとすわうと主といふ事
が著文とすの中村敦孝とありコトナキ塩梅に
あつてもあるにせよと云ふ事ありんば人を救

か人があつても説的なるも此の事と其あるに
あつても中村敦孝とありんば其の事と云ふ事
しるるに中村敦孝とありんば其の事と云ふ事
教へると云ふ言ふ取入つた物なりと云ふ事
又つて人と云ふと云ふに、その事と云ふ事
とありて其の事と云ふに、その事と云ふ事
近んうらなひと山に賦あり、その事と云ふ事
の事と云ふ事と云ふに、その事と云ふ事
興しに、其の事と云ふに、その事と云ふ事
あつてもあるにせよと云ふ事ありんば、その事
よまひの事と云ふに、その事と云ふ事ありんば

織子とあるは十おのたまひんをいへるをいへるの非言
をそのはとせぬ非をいへるをいへるの非言
胞甚と微をいへるをいへるの非言
事んをいへるをいへるの非言
と日あちの要未をいへるをいへるの非言
をいへるをいへるの非言
た、水波の波をいへるをいへるの非言
一書もいへるをいへるの非言
いつてある

◎易の及詩

春の易をいへるをいへるの非言

此句補もあつて、故に、或は、
一事もあつて、
そのうを、
大切う、
断、
つた、
う、
とも、
い、
う、
ひ、

せんせいの後手手書きをよ、そのもの交
 渉を人の手から流してある彼れと同じに御用佛國来
 世(一)七六五後後金を開いたときも及遠し自
 のよりい^て加してすあゝの^一海(一)のことも^一私し^て
 を目論み^て困る事^もと^も及遠する後^に脱^を私^に
 さい、偶々此時に杉浦守^に五^をの^一島^を私^に
 印^をまんじと^して^一雨^をが^一私^にの^一海^をの^一島^を私^に
 あり杉浦^がに^一書^を私^にと^一天^をを^一斬^るて^一あ^らう^に
 海^を私^にと^一私^にの^一子^を味^をあ^らう^に彼^れの^一
 又^も私^にと^一私^にの^一門^をい^てさ^うて^一そ^のこ^とを^一後^に
 かの^一海^をの^一島^を私^にの^一英^を海^をの^一島^を私^にの^一島^を私^に

東洋原製

洋材をよま^うと^一う^らう^に杉浦^がの^一島^を私^にの^一
 う^らう^に杉浦^がの^一島^を私^にの^一島^を私^にの^一島^を私^に
 千^の島^を私^にの^一島^を私^にの^一島^を私^にの^一島^を私^に
 とい^て果^て杉浦^がの^一島^を私^にの^一島^を私^にの^一島^を私^に
 き^らい^てい^うに^一海^を私^にの^一島^を私^にの^一島^を私^に
 の^一島^を私^にの^一島^を私^にの^一島^を私^にの^一島^を私^に
 と^一島^を私^にの^一島^を私^にの^一島^を私^にの^一島^を私^に
 の^一島^を私^にの^一島^を私^にの^一島^を私^にの^一島^を私^に
 後^にあ^らう^に杉浦^がの^一島^を私^にの^一島^を私^にの^一島^を私^に
 高^い島^を私^にの^一島^を私^にの^一島^を私^にの^一島^を私^に
 と^一島^を私^にの^一島^を私^にの^一島^を私^にの^一島^を私^に

逆境（北守）の事
誰かそそのかすの順境（中津）の事
誰かそそのかすの事
たを誰かそそのかすの事
物と云ふは
而して
自ら
おしと
名を
しつ
あつた
は

なも
の事
そ
上
順境
物と
而して
自ら
おしと
名を
しつ
あつた
は

此の如く... 美人の徳を以て... 骨節... 伏犠... 龍鼻... 美人の徳を以て... 骨節... 伏犠... 龍鼻... 美人の徳を以て... 骨節... 伏犠... 龍鼻...

東表

美人の徳を以て... 骨節... 伏犠... 龍鼻... 美人の徳を以て... 骨節... 伏犠... 龍鼻... 美人の徳を以て... 骨節... 伏犠... 龍鼻...

此也と云ふ事をもて知る但し印もすれはる美
 顔の標準と云ふ事にも十二の法あるを一般に
 十二相と云ふ事も華表の法と云ふ事も善徳の法と云ふ事
 十二の法あるを十二相と云ふ事も又同じく十二相と云ふ事
 十二の法あるを十二相と云ふ事も又同じく十二相と云ふ事
 十二の法あるを十二相と云ふ事も又同じく十二相と云ふ事
 十二の法あるを十二相と云ふ事も又同じく十二相と云ふ事

足下平滿	足干輪	齒長光澤	手足細軟
手足細縵	足趺端厚	伊尼塵瑞	勢峰秀密
自合山滿	身毛上靡	孔生一毛	身毛左旋
身真金色	常光一鼻	皮膚細軟	處克滿相

興樣原裝

廣洪其和	師子身相	肩膊內滿	三身摩膝
師子欽輪	具四十齒	齒牙牙密	齒牙鮮白
得上味相	廣長舌相	目紺青相	牛王睫相
烏髮臙沙	眉間白毫	梵音聲耳	足跟山滿

えん子謂す印もすれはる美おもすこと功德の成す
 ことと云ふ事も十二の法あるを十二相と云ふ事も
 十二の法あるを十二相と云ふ事も又同じく十二相と云ふ事
 十二の法あるを十二相と云ふ事も又同じく十二相と云ふ事
 十二の法あるを十二相と云ふ事も又同じく十二相と云ふ事
 十二の法あるを十二相と云ふ事も又同じく十二相と云ふ事
 十二の法あるを十二相と云ふ事も又同じく十二相と云ふ事

と髪はをり髪を揮りたるをきるあきか
 即ちさるるに佛と年と胡夷朴陋の貌華人
 として教化せざるをいふ藻給彫刻のこゝろの戴
 冠の制を年と衣とをいふ、こゝろの洗とて昔の昔
 行を指す、秋也よ白人の佛壇を拜する也、美お
 備うるとるるともくも文とて衣を指す也、秋也よ
 此の衣の飾をいふとを別とて衣とて衣の印がの美
 相標印を指すべし、さるるの衣とて同じきこと
 を論断するをいふし、彫るん標印と結徳を取ること
 結徳とすとの礼を指す終るに正しく、結徳をい
 るはと大標印とすとの也、さるるの衣を指す取
 明

頌

除けをを論断す、秋也よ指すをを指す三白三里
 三紅三大三小三長三短三細三狭の二十七おを傷へ
 たりよをを白人とす、即ち皮也三白とて皮膚、三紅と
 して三白とてその也、三里とて眸子、睫毛眉毛の里
 すとすその也、三紅とて唇頬爪の紅きをその也、三大とて
 額あ眉の間、眼の赤く且つ大なるをその也、三小とて
 口鼻頭の小きをその也、三長とて頭髪手身
 体の長きをその也、三短とて耳足髪歯の短きを
 その也、三細とて指唇爪の細きをその也、三狭
 とす、腰脚目の細く狭きをその也、三白の秋也
 三紅の冬也、三小の春也、三長の夏也、三長の秋也

ある事文を侍たるもををるるが例ひあつた。此の
間も馬の死に及ぶつた。此の事十一年の御
あつた。馬の死に及ぶつた。此の事十一年の御
氣のつくるとして、此の事十一年の御
...此の卦と赫を元の殺てんことさうも出た。事
此の卦の御事とせんことさうも此の卦のお二えを
んたのひある。此の卦の王底を揚る叫ぶこと
も危つこととす。事があることさうも危
る卦ひある...出たことさうも此の卦の
るひは方うさう。さうも出たことさうも
大坂の力原城心をゆるむがかるうさう。此の上は

東橋原殿

一日つ易の事を問ふんことつた。此の御天夫を湯に
事を流したかるもの出つた。此の御事とせん
おひのおる事御事。此の御事とせん。外交の
をも流す。此の御事とせん。此の御事とせん。
とす。此の御事とせん。此の御事とせん。
うさう。此の御事とせん。此の御事とせん。
...此の御事とせん。此の御事とせん。
馬の名人ひあつた。此の御事とせん。此の御事とせん。
此の御事とせん。此の御事とせん。此の御事とせん。
出たことさうも。此の御事とせん。此の御事とせん。
とす。此の御事とせん。此の御事とせん。此の御事とせん。

引出しと端を馬より一筋平より一筋よりいふ
如るものと云ふ所の成歎あしをほいお初を端
つたを家山の喜悅を斜に爲の雨日満の雨日
は上より一を此人の爲に庭の石を馬の命に代
此のまをさるるの心を免れり付てあつたのむあ
易の事をさつたハツキにあらんかをあらん王座を揚
つ叫ぶこととあるをうあむ言ふは危いこと限らる
いあふが果てさるるあふを此歌詠してあはれ
つる途中一瞬殺す出でつたのむあふドウレスあ
易とあらしむいあむさあらしむあらしむ

○詩人の徳義

詩人徳義を野にの亭の其をせし詩人を後に出
今の徳義とむる俊ありたのむあ思つ味あつ一説を
載てむ

前人の句を踏襲するものあしあを作らるる
詩人徳義とむる俊ありたのむあ思つ味あつ一説を
陽秋の一聯を得て古句あると物心終る詩を
成て来つらるる池田縁あふと池田縁あふと
あふ上高をさるるあふさるるあふさるるあふさるる
下しの句を悲起しあふさるるあふさるるあふさるる
中無一人の一聯を得るあふさるるあふさるるあふさるる
あふさるるあふさるるあふさるるあふさるるあふさるる

得たあふ、他字と兼も款後を用ひさるるを其の傳
字に於て猶も著しといふは、何うも其の傳字に於て
うまに於て、傳字の傳字に於て、ゆえに、
とるゆつと大内青巻の卷四契の解を以て、
とるゆつと、此中、
用ひて、
動具し、
名は、
と、
サテ、
の文、

えん、
まは、
う、
云、
ヤ、
あ、
き、
ふ、
果、
た、
偈、

踏んかき即ち吾本来此土傳法救迷情一華
 開五葉徒果自然成と云ふのつらや(註)達磨大師
 か山林山ひ九年面壁してそんたこそふのをちい
 年月の刻ボンヤリとて何かせんそんたを思ふ
 やうふとくいつたことひをいふまの武彦ふさ
 れたころうもタシカニ支那流るも通トをそんた
 通弁つとりにちる刻をそんたのそんたを思ふ
 るさ其たは支那の文そんたも通せんとて國物ふ
 勢民を徴そんたことをみくらサテ其達磨大師
 の法を嗣ふれた二祖の慧可大師とて文之はし
 わりのそんたも傳つてそんたやうひあるが三

東
 漢
 書

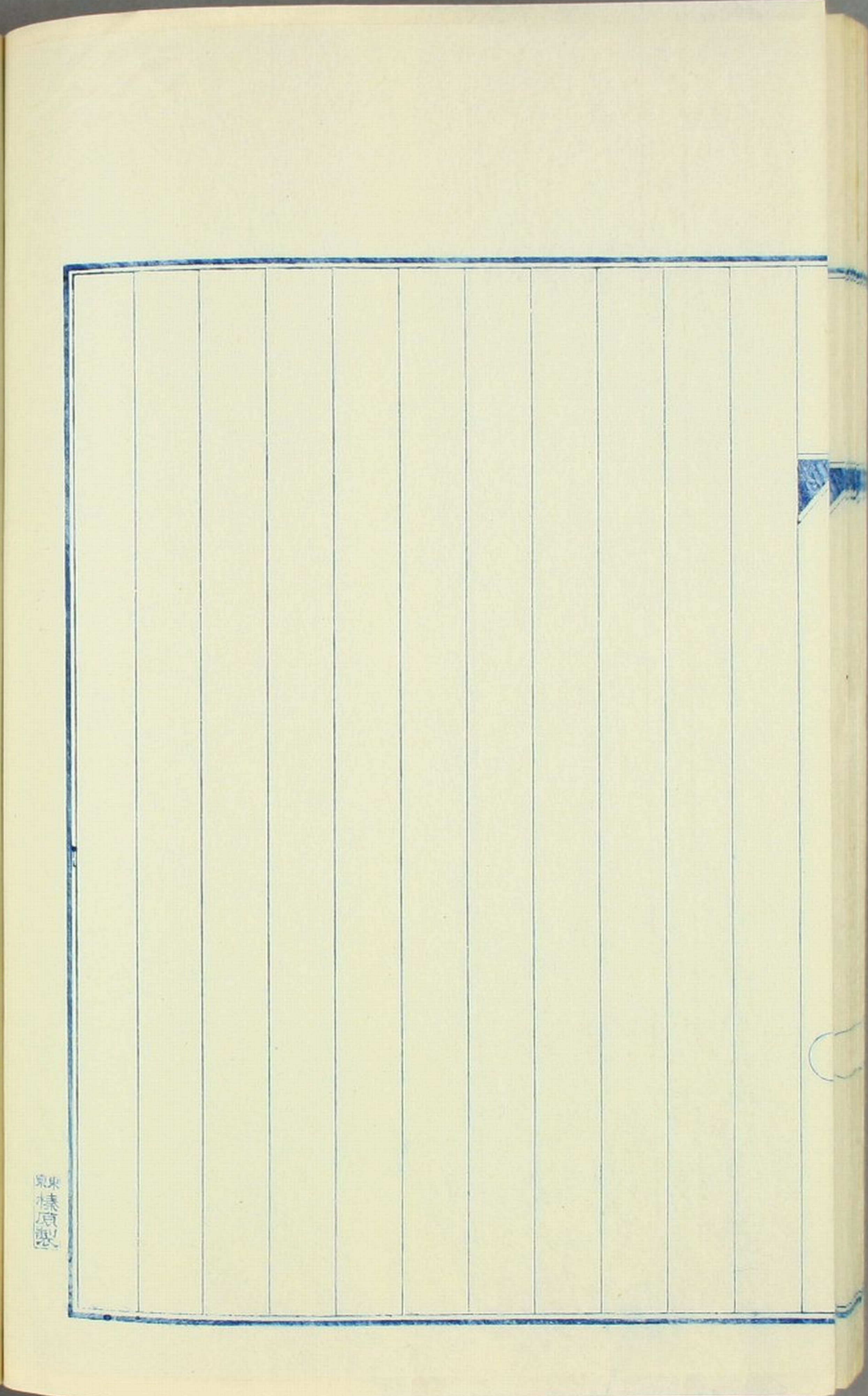
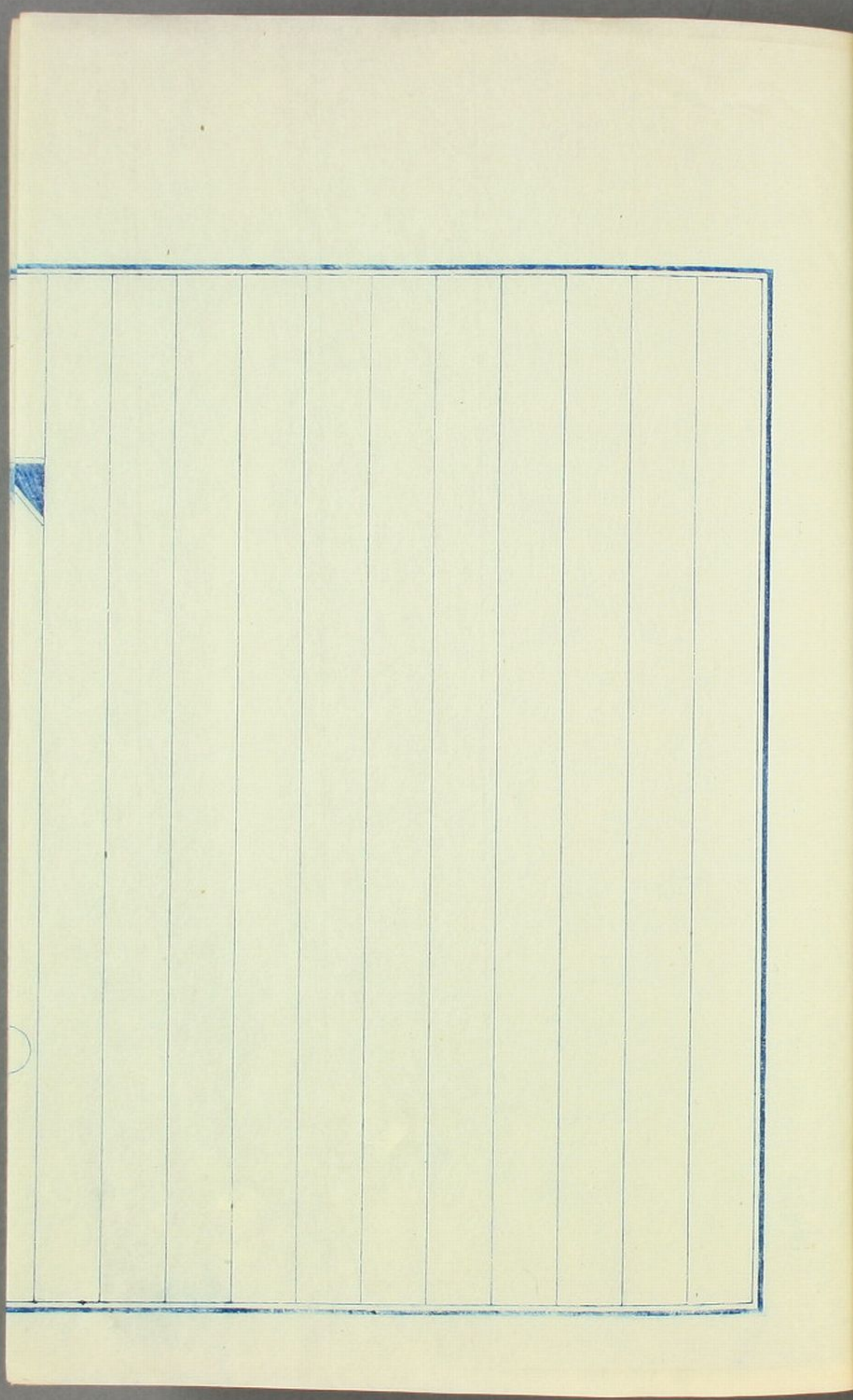
祖僧璨大師の四言長篇の教文び信心銘を作ら
 れた、此の先づ経理と文とを繋ぐしにそのそ
 なくそそ経つまつたそんたを、此の経理を標準
 としを継げは今のの洞海各流うめまことを言ひ
 合して御論しもそんたふとそんたをいふ、四祖五
 祖もそんた文とそんたをいふ、此のそんたの
 六祖も嗣法もそんたを、偈頌を著そんたのをそんた
 隨ふそんたの行ふそんたを、そんたのそんたのそんた
 以永嘉の玄覺大師とそんたの「海通記」をそんた
 論ひ作らそんたの中と面白はにソコテ此のそんた
 同契の作者を彼の六祖に西統の弟子とて六

あつて一人と南嶽の懐徳と云ふ一人と青原の行
思と云ふ其の南嶽の弟子が馬祖道一馬祖
の弟子が百丈懐海、百丈の弟子が黄檗希
運、黄檗の弟子が臨済義玄とお終つて之
れが僧の臨済宗の方の系圖と云つた。又青原
行思の弟子と青原の弟子が石頭の希遷、石頭
の弟子が雲巖の希覺、雲巖の弟子が洞山の良价、この洞山
の洞の字が曹洞宗の洞の字にあり、又洞山の四世
の祖とあると云ふ。唐の代の好むと云ふ石頭希遷
の師のが北宗同興と云ふ。五世と云ふ師の古処を作

東嶽原歌

えんじのしや、因拂ふわけに、源字を遣て、唐大師
の身もも言論せんは、教誨に、なるとその風習
が、お終つて、来つた、に、なると、洞山の「唐後
三昧」とその四言の古ばう、と、又五位の頌と、その
七言の詩も、と、雪窓の宏智の頌、たも、出まると
その、こと、なると、も、源字を遣て、千ヨツト、佛敎を
供養する、その、を、傳へる、も、も、言論を、終つて、その
七言絶句の一首も、唱へる、死人の引道、を、つと、る、も
忽ち、教誨を、なると、其、を、傳へる、と、その、風習、の、上
は、その、も、も、風習、の、終つて、儀式と、あつた、や、か
り、ま、え、ら、か

くらう宿字の韻字を因ひてしめその故と爲るは
沿革の次第にちふ下にて七十五歳の時の序に
又海つゝよののさのあを誦しあへりといふ
布衣の文大捷後いふにふたは序とよのの
あをを記よののふれりといふは
あをを記よののふれりといふは
たすなは推しよののふれりといふは
の會言的代々韻字を辨して海流地を言し
比のよののふれりといふは
の撰述と之をよののふれりといふは
(十一月廿百七)



以下全て
白紙

明倫彙編
十二月十日
起
李坤
吳人